

〈翻訳〉

## メランヒトン『神学要覧』(1559年) — その5 —

(Loci praecipui theologici.1559) 翻訳

前回に引き続き、今回は「神について」の途中まで、ラテン語テキストからの試訳を掲載する。

(SABd. II-1 195-214)

### 菱刈 晃夫

\* \* \*

#### 神について

それゆえに、人類は神を賛美するような神の像ならびに神殿となるように作られていますし、次いでそれゆえに救われています。というのも、神は認められ賛美されることを望んでいるからです。そして、人間の自然が元の状態のままであったなら、人間の精神のなかで、明らかに確かな神の知が輝いていたことでしょう。次いで、アダムとエバが恩恵のなかに受け入れられてから後、真の神を知り、神に祈り、神を賛美する以上に、人間にとって偉大で善良な行いは、ほかにはありません。詩編 149 編に、「主の慈しみに生きる人の集いで賛美の歌をうたえ」<sup>(1)</sup>。詩編 118 編には、「死ぬことなく、生き長らえて主の御業を語り伝えよう」<sup>2</sup>とあります。したがって、人間の最初でかつ最高の関心は、神についての教えを真に学ぶことにあります。ちょうど、第一の戒めがこの義務について特に要求しています。しかし、人間の精神は、この自然の墮落における大きく悲惨な暗闇のなかで、神の存在、あるいは摂理、さらに神の意志がどのようなものかについて、探求しながら彷徨っています。人間の精神には、高潔な者と愚鈍な者との差異にも同様に、多くの明らかに確かな証言が示すように、服従を命じる神、およびこの世の生において残酷な悪事をいつも極刑で罰する神が刻印されているにもかかわらず、恐ろしい疑いがわたしたちの魂を苦しめます。なぜなら、彼らはしばしば善人も悪人も等しく、これらが強大な災難によって打ちのめされるのを見るからです。

そして、とにかく人間の精神は神が悪党を罰するのを認めるとはいえ、それにもかかわらず、神聖な約束が啓示されることなしには回復について知ることはありません。したがって、わたしたちが罰によって打ちのめされると、あるいは人間は降りかかってきたそれらの原因について議論し、あるいは神はなぜこうした弱い自然にそれほど多くの悲惨を浴びせかけるか、と驚きます。ペリクレスはアッティカで起こっている疫病を第一にたぶん物質の汚染が原因だと見なしていましたが、罰が神によるものだとは認めていませんでした。オイディプスは自身が神から罰せられたことを認めていましたが、しかし、罪の赦しについては全く知りませんでした。

したがって、人間の精神の暗闇はそれほど大きいので、神が自分自身を明らかな声と確かな証言によって知らせ、それに次いで創造から人類を作り、その教会の創建するまで、さらにそ

の声が律法および回復の約束を伝え、ちょうど洪水における救済や、ソドムの抹殺や、イスラエルの人々をエジプトから引き出したことや、死者の多くの復活が示すような、強大な奇跡を付け加えたことが、いかに巨大な恩恵であるかということを、わたしたちは知なのです。

こうした明確な証言から明らかにされた神を、わたしたちは探求し、異教徒や福音を知らないすべての人々から分かれ、わたしたちは祈りのなかで、わたしたちが祈る神を、その神がどこにいて、なぜ自身を明らかにしたのか、と考えます。わたしたちは異教徒のように、あるいは偶像へと走る者たちのように、心を揺さぶることはしません。また、神の啓示について無関心に、あるいは冷淡に考えたりもしません。そうではなく、わたしたちは、わたしたちを助けようと欲している巨大な恩恵と確かな証言がある、ということを知なのです。それゆえ、パウロはコリント信徒への手紙1の1章で、わたしたちを啓示へと導いています。「世は自分の知恵で神を知ることではできませんでした。それは神の知恵になっっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです」<sup>(3)</sup>。つまり、わたしたちの心は揺れ動くので、こうした美しい秩序が創造物のなかに極めて知恵ある形で確立され、わたしたちにそうした活動について注意を促していても、それにもかかわらず、わたしたちは摂理があるのかどうか、神によって受け入れられているのかどうか、聞き入れられているのか、助けられるのか、と疑うのです。なので、神自身が明らかにされた福音の声が宣言されても、それにもかかわらず、こうした大部分の人間はこれを作り話であるかのように嘲笑うのです。しかし、ある者はこれを喜んで受け入れます。これらの者たちは正しく神を知ること、正しく神に祈ることを学びます。そして、永遠の命を、正義を、栄光などを贈られることになります。

このように、キリストはわたしたちを神の啓示へと導きます。フィリポが、父が示されることを請い求めたとき、彼を厳しく咎めて、そうした考察を取り消して、こう述べられました。「わたしを見た者は、父を見たのだ」<sup>(4)</sup>。キリストは、移ろいやすい考察によって神が探求されるのではなく、わたしたちの目を、このように神の子が示されたところに固定されるのを望んでいます。そして、この永遠の父である神へと、祈りによって向けられることを。永遠の父なる神は、この子を送り、福音を与えることによって自らを明らかにし、この子という仲介者のゆえに、わたしたちを受け入れ、わたしたちの祈りを聴き聞き届けるのです。このように、わたしたちを救うために、常にはじめから自身の秘密の座より現れている神、自身を明らかにしている神、親しくわたしたちと語る神は、ある言葉と証言とを与えました。それと人間の精神は結び付いていますが、それはこうした声とこうした証言によって自らを明らかにしたのが永遠の神であり創造者であり、それはここにまさにいることを確信させるためなのです。こうして第一の戒めにおいて神は人々を言葉と結び付けます。それはシナイ山に鳴り響き、出エジプトへと続きます。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」<sup>(5)</sup>。出エジプトにおけるすべての奇跡的な出来事は神が現在していることの証言である、理解されます。この同じ神が仲介者についての約束を与えられました。それは、これによってはじめのそのときから、ずっと教父たちは自分たちのことが聞き入れられるのを知ようになるためでした。このように、彼らの祈りはこの神と結び付けられました。それは、

自らを出エジプトにおいて明らかにし、仲介者についての約束を与えた神でした。ダビデがいうように、「わが主に賜った主の御言葉、わたしの右の座に就くがよい。あなたはとこしえの祭司」<sup>⑥</sup> など。このように、キリストが引き出され、十字架につけられ、蘇り、そして福音の光がわたしたちに認識されてからずっと、こうした証言そのものをわたしたちは自分たちに説明し、この子を見つめ、そして次の二つのことを学ぶのです。神とは何であり、その意志は何か、ということ。そして、わたしたちは自らの祈りを、異教徒、トルコ人、ユダヤ人から賢明かつ熱心に区別するのです。というのも、とりわけ二つのもっとも重要な問いにおいて、真の祈りと誤った祈りは異なるからです。それは、神の本質についての問いと、意志についての問いです。トルコ人が、たとえ自分たちがひとつの神、天と地との創造者に祈るといっても、それにもかかわらず、彼らは真の神から逸脱しています。なぜなら、仲介者として子を送ったのがこの神であることを、彼らは否定するからです。したがって、彼らは正しく祈っていることにはなりません。というのも、永遠で不動の原則が、ヨハネによる福音書5章に、こうあるからです<sup>7</sup>。「子を敬わない者は、子をお遣しになった父をも敬わない」。したがって、最初にトルコ人は神の本質について誤っています。なぜなら、彼らは自分たちのために自分の神を作り上げるからです。それはイエス・キリストの父ではないのです。

第二に、彼らは神の意志について誤りを犯します。なぜなら、彼らはその約束を知らず、その子が仲介者であることを否定するからです。彼らは終わることのない疑いのなかに止まり、自分たちが神によって受け入れられ、聞き届けられているのを確信することができません。そうした疑いの内に止まる者は、正に祈ることをせず、神から逃げ、神を軽蔑するか、あるいは永遠の絶望と冒瀆へと突進するのです。

反対に、神の教会は、これが万物を創造した神であると断言します。神は、その子を送り、福音を与え、強力な証言を記すことで、自らを明らかにしています。これは預言および福音の記述のなかに列挙されています。このように最初、神の本質について人は、人間の想像からではなく、神の言葉から与えられた確かな証言によって判断します。次に、神の意志についてわたしたちは、驚くべき言葉にし難い計画によって、神の子が仲介者として立てられてあることから、さらにこの仲介者によって、わたしたちの冀うことがらが確かに受け入れられ、聞き届けられていることから、確かに知るのです。はじめからこうした区別が考慮されることによって、確かにそれは祈りのなかで日々認識されるべきなのですが、どのように神が求められ、知られ、そして礼拝されるべきかが、より正しく理解されます。それは、ロンバルドゥスの注釈のなかに限りなく積み重なっている、たくさんの無益な考察よりも、より正しい理解なのです。

さらに、神の何らかの定義に到達するために、二つのものを比較してみましょう。一方は、プラトンによる多くのもので、一方は、完全なものです。これは、教会に伝えられていて、洗礼による言葉によって知られています。プラトンのものは、こうです。神は永遠の精神であり、自然における善の原因である<sup>⑧</sup>。しかし、このプラトンの定義はとても学殖豊かに組み立てられているとはいえ、どうしてそうなのかという理由に欠け、わたしたちは訓練に乏しいので、判断するのが困難です。それでも、まだ神が自分自身を明らかにしたようには、この神

を定義していないので、他のより明確で適切な定義が求められるのです。それは、こうです。神は永遠の精神である。つまり、霊的な、知性的な、永遠の本質であり、自然における善の原因である。つまり、真であり、善であり、義であるような、すべての善なる事物の、しかも自然と人間の本性における全秩序を確かな規則へと定めた万能の創造者である。それは、確実な服従である。このすべてをプラトンは包含しました。しかし、これらは依然として人間の精神による認識です。たとえ、確かな証明によって生じた、真実の学識あるものであるにせよ。そこでやはり、神が自分自身を明らかにしたのはどのようなものなのか、付加される必要があるのです。したがって、わたしたちはこのもうひとつの定義に行き着きます。

神は霊的な本質である。知性的な、永遠の、真であり、善であり、純粹であり、義であり、憐れみ深く、自由で、無限の力と知恵ある本質であり、永遠なる父である。この父は自身の像である子を永遠から産み出した。この子は神と永遠に共存する像であり、聖霊は父と子から生じた。ちょうど神性が確かな言葉によって明らかにされているように、永遠なる父は子と聖霊とともに形作り、天と地、そしてすべての被造物を保つ。さらに、人類にあっては神の像、さらに確かな服従に向けて作られた。神は自身の教会を、そこからこの明らかにされたひとつの真の神性が、確かな証言と預言者や使徒たちによって伝えられた言葉を通じて、認識され、祈られ、崇拜されるよう、選んだ。それは、かの伝えられた神性の言葉に従ってであり、これとは異なる神を捏造する、すべての礼拝は断罪される。そして、この真の神性が永遠の生において祝福される。

この〔神に関する〕定義は、神が何であるか、より適切に語っています。そして、わたしたちを神性の啓示へと導きます。ちょうど教会において常にこの教えが伝えられてきているように。創世記の第一章で、神は知性的な本質であることが証言されています。すなわち、「神は言われた」<sup>(9)</sup>。ところで、話すことが獣ではなく、知性の本質であることは明白です。しかも、人間の創造が、善い、純粹な、正しい本質および自由な意志であることを証言しています。人間は神の像に従って作られ、善、正義、そして秩序を指示する知を神は刻みつけました。さらに、意志の自由も付加しました。もっとも、この善なるものは、最初の良心の墮落後に損なわれてしまいましたが。そのうえ、創造そのものが、神が永遠で万能の本質であることを証言しています。こういわれるように。「初めに、神は天地を創造された」<sup>(10)</sup>。

確かにそれでも三つのペルソナは、たとえこの最初の章ではやや不明瞭に示されているにせよ、それでも徐々により明瞭に啓示されていきます。話す父は、永遠の父の像である言葉を産み出しました。そして、聖霊について明白に、こういわれます。「神の霊が水の面を動いていた」<sup>(11)</sup>。しかし、続いて父祖や預言者たちには、より明瞭な教えが示されます。ダビデとイザヤは、天使およびすべての被造物の上に明白にメシアを置き、神と呼びました。詩編2編、「お前はわたしの子」<sup>(12)</sup>など。さらに、詩編45編、「王はあなたの美しさを慕う。王はあなたの主。彼の前にひれ伏すがよい」<sup>(13)</sup>。そしてイザヤ書9章、「ひとりのみどり子がわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる」<sup>(14)</sup>。

ようやく、新約聖書において三つのペルソナがもっとも明白に啓示されます。キリストの洗

礼に際して父がいったように。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」<sup>(15)</sup>。子が川に公然と立っているのが見られます。聖霊はまさにはっきりと見える形で子に降りてきます<sup>(16)</sup>。この啓示のなかに、神に関するわたしたちの認識が見出されます。そして、わたしたちの祈りを、異教徒、トルコ人、ユダヤ人のものから切り離します。さらに、自らを、自分の子であるイエス・キリストを送り、聖霊によって明らかにすることで、ここに啓示する永遠のこの父を、わたしたちは賛美します。子と聖霊がひとつのものとなり、万物を創造し助ける父を賛美するのです。祈りのあいだに、このことをしばしば思うべきです。しかし、どのようにペルソナが区別されるかは、後に語られます。もちろん、まず残されたところの記事が明らかにされねばなりません。

被造物は、父、子、そして聖霊によって造られた、と語りました。それは、同じように旧約新約聖書のいたるところで伝えられています。ヨハネによる福音書1章では<sup>(17)</sup>、言葉について。「万物は言によって成った」。そして、聖霊については、「神の霊が水の面を動いていた」<sup>(18)</sup>。したがって、常に創造され保持されているものは、すべて永遠の父、子、そして聖霊という三位一体によるわざであるという原則を、精神に刻み込んでおかなければなりません。

最後に、神を定義するなかで、わたしたちの精神が教会において自らを啓示するこの神に繋がれているということに、言及されることになります。そして、この神はまさに万物の創造主であることを知ります。神はこのことを自らの言葉と確かな証言によって、世界の始まりから啓示しています。また、わたしたちはちょうど神が自らを啓示したように、神について考えなければならぬことを知ります。異教徒やトルコ人も、同じように自分たちも天と地を作ったこの神を礼拝していると自慢しますが、彼らは誤ってそれを自慢しています。なぜなら、彼らは魂から外れ、自らを言葉と子を送ったことによって啓示した創造主に耳を傾けようとしなからずです。ゆえに、彼らは真の創造主からは外れ、自分たちの創造主を自分たちの考察によって作り上げているのです。それゆえに、神についてのすべての思考とすべての礼拝において精神は、肉のなかに送られたキリスト、十字架にかけられ復活したキリストに注目しなければなりません。そして、この子を送り、教会と自らの福音を与えたのが、まさにこの神であり創造主であると決心しなければならないのです。

神についての定義のできるだけ細部を概観しました。ここで同時にわたしたちは、神に帰せられる諸徳を知ることになります。人間あるいは天使における知恵、正しさ、善は偶然的であり、移ろいやすいものですが、神の徳は偶然的ではありません。ちょうど、神の力がその本質や他の何かからは区別できないように。それゆえに、神の知恵、真実、正しさ、善は他の何かではなく、神の本質そのものであり、それはいわば生きながら、自らによって自らに止まるもの（subsistens）であり、知性であり、永遠であり、万能であり、善であり、正しさなのです。

教会が、こうした神の定義を認識し、目の前に異教徒の考えから区別して保つために、キリストはわたしたちのために、教会に、初めにもっともよく知られた儀式を委ねました。わたしは、あなたに父と子と聖霊の名において洗礼を授ける。つまり、こういうことです。わたしは、キリストから委ねられたこの洗礼によって、あなたが万物の造り主である神、永遠の父、その子イエス・キリスト、そして聖霊によって回復させられたことを証します。あなたは永遠の父



による子イエス・キリスト、およびあなたが呼び求めるこの信頼通じて、この神と和解していることを知るのです。神はあなたを聖霊によって導き、永遠の生に向けて蘇らせるのです。ちょうど、神の約束によって確言されているように。「わたしはすべての人にわが聖霊を注ぐ」<sup>(19)</sup>。そして、キリストはヨハネによる福音書14章で、こう述べています。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である」<sup>(20)</sup>。

それゆえ、神について考える場合には、あるいは教えるにせよ、あるいは祈るにせよ、洗礼の教えと約束とをわたしたちは思い浮かべるのであり、〔サクラメントの〕数ではなく、なぜ子が送られたのか、その理由について探究するのです。わたしたちは、和解の約束、驚くべき聖なるものによる支配について探究します。それは、キリストによって悪魔に対して守られたものであり、聖霊によって奇跡的に蘇らせられたものなのです。たとえ、もし悪魔が殺人者であって、驚くべきわなによって神から離反させようとして個人を攻撃するとしても、それにもかかわらずキリストは反対にその羊たちのために防戦するのです。彼らが、どれほどか弱く惨めであっても。ちょうど、こういわれているように。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う」<sup>(21)</sup>。子によって贈られた神の感嘆に値する恩恵について考えると同時に、わたしたちはその都度、洗礼の言葉を声高に繰り返すのです。

### 神の単一性について

神の永遠の本質は、これまでの定義によれば一つです。永遠の父、父の像である子、そして聖霊は一つなのです。そして、ペルソナは神性が自らの内で記述〔規定〕されるごとに区別されます。しかし、被造物に対立させられるときには、一つの永遠の本質に触れなければならなくなります。申命記6章にある通り。「聞け、イスラエルよ。我らの主、主は唯一の主である」<sup>(22)</sup>。そして、敬虔な人々は名称を尊重します。教会での礼拝は異教徒のものから区別されるべきであるとわたしはいいました。したがって、イスラエルの人々は特別な名称エホバを神に与えました。創造主である真の神と区別するために。この神は自らをこの人々のなかに啓示し、異教徒の偶像や共通の神性から区別したのです。

申命記4章には、こうあります。「あなたは、主こそ神であり、ほかに神はいないということを示され、知るに至った」<sup>(23)</sup>。つまり、この神はこのイスラエルの人々に神は一人であることを啓示したのです。申命記32章には、こうあります。「しかし見よ、わたしこそ、わたしこそそれである。わたしのほかに神はいない」<sup>(24)</sup>。イザヤ書44章には、こうあります。「イスラエルの王である主、イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はいない」<sup>(25)</sup>。45章には、「わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はいない。光を造り、闇を創造し」<sup>(26)</sup>とあります。同じく、°わたしをおいて神はない。正しい神、救いを与える神は、わたしのほかにはない。地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ。わたしは神、ほかにはいない」<sup>(27)</sup>。コリントの信徒への

手紙1には、こうあります「世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています」<sup>(28)</sup>。たとえ天や地に神々と呼ばれるものがないとしても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。エフェソの信徒への手紙には、こうあります。「すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます」<sup>(29)</sup>。

### 神性の三つのペルソナについて

この節では、ペルソナという言葉で何が意味されているのか、明確にする必要があります。したがって、まずこの節で、この定義に属するものを集めてみます。位格 (Persona) は、この節で教会が語るように、不可分の実体 (substantia) であり、知性 (intelligens) であり、伝達不可能なもの (incommunicabilis) なんものです。教会の古い著述家たちにとっては、この二つの言葉、実在 (οὐσία ウーシア：存在) とペルソナ (ὑπόστασις ヒュポスタシス：下支えするもの) を区別するのは常であり、明白でした。そして、ウーシアが一つ存在するということも。つまり、永遠の神、子、そして聖霊の本質ですが、しかし、それは三つのヒュポスタシスを持ちます。つまり、三つの真の実在であり、捏造されたものでもなく、移ろうものでもなく、不明瞭なものでもなく、明確な、単一の知性なのです。このラテン語の呼び名としてはペルソナという名が用いられていますが、とはいえギリシャ語の呼び名ヒュポスタシス〔下で支えているもの〕は明確です。それにもかかわらず、厚顔無恥な性格の者はしばしば正しい言説を乱すので、依然としてヒュポスタシスという言葉についての諍いが生じるのです。したがって、ギリシャ人はこれを止めてラテン人に従い、再びここから三つの顔 (πρόσωπον プロソパ) について語り始めたのです。しかし、わたしたちは言葉についての諍いは止めにして、教会の見解をしっかりと保ち続けましょう。そして、曖昧なところなく、教会において用いられ受け入れられてきた言葉を用いることにしましょう。セルヴェという狂信者は、ペルソナという言葉を弄び、久しくラテン人に明瞭であった習慣および区別の努力に対して議論をしかけました。ちょうど、ロスキウムはあるところではアキレスのペルソナ〔仮面・役〕を演じ、あるところではウリュシスのペルソナを演じ、あるいはあるところでは執政官、あるところでは奴隷であるといったような区別に対して。キケローは、次のように述べています。国家においては元首のペルソナ〔役〕を見つめ果たすことが重要である。セルヴェは古人によるこの言葉の意味をべてんで捻じ曲げて神性の三つのペルソナの部分に当てはめたのです。しかし、わたしたちはこうした不敬虔なべてんから遠ざかり、切り離されて、教会が全く違って語っており、ペルソナが不可分の実体であり、知性であり、そして伝達不可能なものであることを知らなければならぬのです。特に、これを認識する上でキリストの洗礼を心に留めておくことは役立ちます。ここに三つのペルソナが明確に区別されて示されているからです。父が次の言葉を発します。

「これはわたしの愛する子」<sup>(30)</sup>。川に立っている子が見られます。そして、聖霊が目に見える形で送られます。このように示されて、これに確かな証言が当てられます。これは、子とはたれであり、その本性は何か、聖霊とは何であり、その本質はどのようなものかを語っています。

ゆえに、最初にこの区別が保たれなければなりません。永遠の父は誕生したペルソナではなく、父は永遠より自らの像である子を産んだのです。子は父の像であり、父によって永遠より生じたのです。子は、後で語られるように、あるときマリアのお腹のなかで人間の本性を身につけました。聖霊は父と子から発した実行者であり、精神を聖別するために送られました。つまり、聖霊は、新しい光、義しさ、神に喜ばれる生と永遠を、永遠の命の相続人となるであろう者たちの精神に点火するために、送られたのです。したがって、神性の三つのペルソナが存在するのであって、それは無限であり、永遠に共存するのであり、同本質のもの（ὁμοούσιος）なのです。わたしたちの主イエス・キリストの父、子。これらは言葉（λόγος）と呼ばれ、永遠の父の像であり、そして聖霊。これ以上の神性のペルソナは存在しないのです。

とはいえ、すべての天使および人間の精神は、こうした神秘にびっくり驚愕して仰天してしまいます。神が子を産み、父と子から聖別する聖霊が発出したことに。それにもかかわらず、何度もすでに述べたように、神が自らを啓示したように、神について考えるべきであり、だからそう思う必要がわたしたちにはあるのです。異教徒たちは自らの考察によって神を求め、その魂は彷徨い歩きます。それに対して、教会は永遠であり、万能であり、創造者であり、自らを啓示した神を知っています。そして、わたしたちはこの神秘を奥深くまで見通すことはないとはいえ、それにもかかわらず、この生において神はわたしたちがこれを認識することに着手され始めることを望み、わたしたちの礼拝が誤ったものと区別されるのを望んでいます。そして、自らの言葉による確かな証言によって啓示を提供しました。このなかで、ちょうど母のお腹で臍の緒を通じて栄養をとる胎児のように、同じようにわたしたちは閉じ込められた状態にあり、神の認識と神の言葉から命を摂取しているのです。神が自らを明らかにしたように、わたしたちは神を礼拝するのです。

## 子について

さて、子は次のように記されています。ヨハネによる福音書1章ではロゴスと呼ばれています<sup>(31)</sup>。コロサイの信徒への手紙では神の像（*imago Dei*）と<sup>(32)</sup>。ヘブライ人への手紙では栄光の輝き<sup>(33)</sup>、つまり、父の実体の似姿あるいは像と呼ばれています。そして、テキストが子の神聖な本性について語っているのは明白です。というのも、万物は父によって創造されたと述べているからです。ニケーア信仰告白では、光の光といわれています。こうしたいい方を比較すると、次のことが明らかになります。子は像でありロゴスと呼ばれていることが。したがって、像は父の考えによって生まれたのです。何らかの方法でこのことが熟考されるように、わたしたちの精神から例を取り出してみましょう。

すなわち、神は人間のなかに自らの痕跡が認められるのを望んだのです。そして、もし人間



の本性が最初の光を保持していたならば、神聖な本性の鏡はより少なく覆われていたことでしょう。それにもかかわらず、この暗闇のなかで今もどこかでこの痕跡が認識されるのは可能です。やがて人間の精神は思考することで認識された事物の像に色をつけますが、しかし、わたしたちは自分の本質をそれらの像に移し替えることはしません。そうした思考は突然であり活動も消え去ってしまうものです。それに対して、自分を眺める永遠の父は、自己の像である自身の思考を産み出し、消え去りはしません。そうではなく、自身に伝達された本質に止まり続けるのです。

したがって、この像は第二のペルソナであり、そうしたい方に相応しいものです。これはロゴス言葉といわれますが、それは思考から生じたからです。像イマージュといわれますが、それは思考が事物について考えられた像であるからです。栄光の輝きといわれますが、それはギリシャ語でより明瞭に光輝（ἀπαύρασμα）と記されています。つまり、他の光から生じた輝きということです。こうして子とは父の光から生じた輝きであり、信仰告白で読まれる通りです。光の光。同じく、神の実体の似像、つまり、消え去る像ではなく、伝達された本質に止まり続けるものなのです。

したがって、ちょうど人間の本性におけるのと同じように、わたしたちは子を、神の実体（substantia）の子孫、神に似た者として語るので、神の実体から生まれ、しかもその像である子の第二のペルソナが、語られることになります。ゆえに、子とその他のペルソナとを区別する特質は、この子孫であることにあり、像であるところにあります。そして、この第二のペルソナを、あるときマリアのお腹の中で人間の本性に付加されたものとして置くとき、この区別はより明瞭になります。というのも、父は人間の本性を引き受けるわけでも、聖霊が人間の本性を引き受けるわけでもなく、子はキリストなのです。つまり、約束された贖い主であり、二つの本性が奇跡的に一体となった一つのペルソナであり、すなわちあの永遠の父の像であり、あるいはロゴスであり人間本性なのです。というのも、教会の共通の習慣では、これに関する条項のなかで、一体という言葉が用いられています。

これは驚くべきことであり、あらゆる被造物の理解をはるかに超えて置かれています。しかし、わたしたちはこの神秘が、神に正しく祈り、こうした不思議な恩恵の理由を考えるために、教会に啓示されていることを知っています。この永遠の神は絆によって自らを人間の本性に連結したのです。したがって、神は真にわたしたちを気遣い、さらに愛し、そして贖い主となり、罪に対する怒りを和らげるために、後にしばしば語られなければならないように、この子を送ったのです。

第三のペルソナ、聖霊は、父と子から生じているといわれています。この特質は第三のペルソナに帰されます。このペルソナには、次のような特質が帰されます。それは、再生する心に送られます。つまり、これを通じて父と子は新しい光、神に喜ばれる新しい情動（motus）、正しさ、そして再生した心の生を点火させるのです。じつは、神が支配し、動かし、点火するとき、そのとき聖霊が心のなかにいるのです。ちょうど、コリントの信徒への手紙1の3章で語られているように。「あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住

んでいることを知らないのですか」<sup>(34)</sup>。こうした支配ならびに聖化は、神による特別の行為と呼ばれています。そのうえ、子が思考から生まれたように、聖霊は父と子の意志から生じたのです。というのも、意志は意図し、愛するものだからです。ちょうど、人間の心が像を産むのではなく、霊あるいは息が産むように。

## 証言

マタイによる福音書の最後に、こうあります。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼バプテスマを受け<sup>(35)</sup>。この呼び方は三つのベルソナを数え上げていて、その部分に能力と経緯を帰しています。というのも、キリストはこの最初の儀式に福音のすべてが包含されるのを望んだからです。それゆえに、わたしたちが神によって受け入れられていることを証すると同時に、神とはだれであり、どのような神を礼拝し、何を神はわたしたちに与えてくれるのかを教えているのです。わたしはあなたに父と子と聖霊の御名において洗礼を受ける。これはつまり、わたしはあなたが永遠の父によって、子によって、そして聖霊によって受け入れられていることを証する、という意味です。これらの憐れみと能力が、あなたを罪と永遠の死から自由にし、あなたに義と永遠の命を与えるために。したがって、自らを啓示された真の神から逸脱する異教徒のようにではなく礼拝し、ここに万物を創造した神がいることを決定しましょう。この神は、自らをこの言葉による確かな証言でもって世の初めから啓示しており、洗礼においてあなたと契約を結び、自らがわたしたちの主イエス・キリストの父であり、和解の子を立て、あなたのなかで義と永遠の命に取り掛かるために聖霊を送ると断言しているのです。

あなたは、福音のすべてが洗礼の言葉のなかに豊かに含まれていて、だれが神であるかが明らかにされているのを知るのです。わたしはあなたに名において洗礼を受ける。それはつまり、礼拝において、同じく神の掟において授けるということです。同じく、父と子と聖霊を知り、祈ることにおいてということです。わたしは父と子と聖霊に懇願します。あなたに受け入れられ、聞き届けられて、あなたの上に証言されているこれらに冀みます。これが洗礼の言葉の意味です。

この言葉によって、いつでも父は神であり、万能であり、礼拝されなければならないことが公言されています。そして、神の栄誉のために社会には子と聖霊とが与えられているのです。しかも、これらの能力は同等である必要があります。力が同等であるものはどれでも、同本質です。さらに、父と子であるキリストが異なるベルソナであることは明白です。というのも、もし聖霊が事物を刺激し、あるいは動かす神自身を意味するのなら、父は二度呼ばれることになり、それは無駄な繰り返しになるからです。こうした意味で、バシリウスは賢く厳しくキリストのこの言葉によって論じます。父と子と聖霊は同本質（ὁμοούσιος）である。わたしたちは、わたしたちが受け取るように、洗礼を受けられるべきです。さらに、わたしたちは洗礼を受けられたように信じるべきです。その上、わたしたちは父と子と聖霊を信じるように賛美すべきです。

しかし、預言者や使徒による証言は聖書のいたるところに散らばっていて、あるものはただ子について語り、あるものは聖霊についてというようなので、わたしたちは最初に子について

の証言を集めなければならないでしょう。さらに、卓越した証拠がヨハネによる福音書の最初の章にあります。それは確かに彼の福音を書き記したものだといわれています。というのも、エビオンそれからケリントスがユダヤ人の考えを流布し<sup>(36)</sup>、キリストから神的な本性を引き離し、彼にはただ人間の本性だけがあると教えたからでした。

しかし、ヨハネに取り組む前に、聖書から取り入れられた二つの〔思想の〕流れを前提しておきましょう。それは、わたしの判断によれば教えるのに有益で、敬虔な人々を励ましてくれるからです。まず、キリストは神の子の本性であると告白されることが必要です。というのも、福音は子であるキリストから接ぎ木された子を区別するからです。すなわち、ヨハネはキリストをひとり子として生まれた子と呼びます。ヨハネによる福音書1章、「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって」<sup>(37)</sup>。さらに、疑うところは全くなく、キリストは神の子の本性であるので、そのなかでは神的な本性は本質的（substantialiter）であることが必要です。しかし、どれほどキリストが神のペルソナの外にあらうと、そのなかには神的な本性があるのであり、それはペルソナである必要があります。こうしてパウロはキリストについて、こう語ります。「キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており」<sup>(38)</sup>。つまり、これはキリストが神的なペルソナであり、まるでそのなかには神的なものが保たれているというようなものです。それはダビデにおいてのみ生産的で分離的ではなく、キリスト自身のヒュポスタシスが神的なのです。というのも、ギリシャ人はちょうどわたしたちが一般にペルソナというようなものを身体（σῶμα）といいますから。

次の流れ。預言者と使徒によるすべての聖書は大きく一致して、キリストが崇拜され礼拝されること、さらにキリストを信頼することを命じています。ゆえに、キリストには無限の能力が帰せられるのであり、それはどこにでもいて、心を観察し、〔その声を〕聞き取るのです。キリストは義と永遠の命を与えてくれます。したがって、キリストのなかには神的な本性があることが必要なのです。

さて、キリストを礼拝し、キリストを信頼することに関する明らかな証言が残っています。マタイによる福音書11章、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」<sup>(39)</sup>。ヨハネによる福音書3章、「御子を信じる人は永遠の命を得ている」<sup>(40)</sup>。イザヤ書11章、「その日が来ればエッサイの根はすべての民の旗印として立てられ」<sup>(41)</sup>。詩編45編、「王はあなたの美しさを慕う。王はあなたの主。彼の前にひれ伏すがよい」<sup>(42)</sup>。詩編72編、「王が太陽と共に永らえ、月のある限り、代々に永らえますように」<sup>(43)</sup>。同じく、「彼のために人々が常に祈り」<sup>(44)</sup>。使徒言行録7章、「主よ、わたしの霊をお受けください」<sup>(45)</sup>。テサロニケの信徒への手紙1、3章、「どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように」<sup>(46)</sup>。テサロニケの信徒への手紙2、2章、「わたしたちの主イエス・キリスト御自身、ならびに、わたしたちを愛して、永遠の慰めと確かな希望とを恵みによって与えてくださる、わたしたちの父である神が」<sup>(47)</sup>。創世記48章、「わたしの先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神よ。わたしの生涯を今日まで、導かれた牧者なる神よ。わたしをあらゆる苦しみから、贖われた御

使いよ。どうか、この子供たちの上に、祝福をお与えください」<sup>(48)</sup>。

このような類似した証言のなかで、永遠なるキリストを礼拝することについて語られています。まだ人間とともに目に見えて止まっていないにもかかわらず。それゆえに、こうした崇拜は、ユダヤ人が屁理窟をこねるようには理解されえません。崇拜の外的な印については、現在いわば封建家臣の王に市民の帝国が提供されています。しかし、こうした文章はメサイアについて熱く語っています。救世主は、祈る人の声を聞き取り、自らの教会を、どの地においてもいつの時においても、助け保っています。これが万能の本性に固有のものなのです。したがって、預言者の書のなかでメサイアを礼拝することに関するこうした教義を詳しく調べることは有益です。そして、教父、預言者、さらに他の敬虔な人にとって、旧約聖書によって公然と礼拝されているのは、メサイア自身の神性であることは明らかです。そして、こうした証言はわたしたちを子の本性について教育してくれるだけではなく、わたしたちを慰め、礼拝に向けて鼓舞してくれるのです。

ゆえに、キリストを礼拝することについて教えられることに、常にこの流れを考慮しておきましょう。わたしたちは、キリストのなかには神的な本性があると告白しなければなりません。というのも、不在のものを礼拝すること、それは目に見えて認識されるものではないのですが、このことは万能のもののゆえだからです。というのも、彼はあらゆる地におけるすべての人々の心の動き〔情動〕(motus cordium)を見て、それを感じるからです。ここで教会の霊を思い出してみましょう。それは、しばしば祈りの決まり文句を繰り返します。キリストよ、憐れみたまえ、と。この祈りはキリストの神性を表明しています。

いまやヨハネによる福音書に取り組みましょう。そこでの記述はキリストにおける本性を神性から始めています。「初めに言<sup>ことば</sup>があった」<sup>(49)</sup>。このように彼は神の子を呼びます。それには後に人間の本性が付加されます。それからこういわれているように。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」<sup>(50)</sup>。しかし、その本性について最初に語るところで、受肉の前にそれはあって、言葉(ロゴス)は永遠であることを断言しています。というのも、創造以前にあったのだといわれていて、万物はそれから成ったといわれているからです。

そして、このロゴスは神と名づけられ、次のように述べています。「言は神であった」。というのも、ギリシャ人による話は、ロゴスは主語の場所に置かなければならないと証言し、神は述語だからです。神を呼ぶここにおいて曖昧なものは何もありません。というのも、話は神的な本質について記述するように企てられています。したがって、神という名前は、他の場所で「わたしは言う。あなたたちは神々である」といわれているように、人間を管理する神の働きについて与えられていると解してはならず、もっとも的確には、永遠で、万能であり、知性であり、善き本質であり、作者であるものについていわれていると解されなければなりません。ちょうど後にヨハネによる福音書で、こう断言されているように。すべてはこのロゴスによって作られた。ゆえに、わたしはロゴスが永遠の神であり創造者であるという。

善き精神は、こうした証言が確実であることを理解し、福音の声のなかでこれに同意し、屁理窟や福音の墮落に近づくこともありません。しかし、だれか狡猾で不敬虔な者、たとえばサモサ

タのパウロ<sup>(51)</sup>、フォティヌス、そして最近ではセルヴェは、非道にもヨハネのことをあえて愚弄し破壊しようとしたのです。そのうえ、ロゴスはペルソナを意味してはいないとがんばるのです。しかし、ちょうど人間の場合のように、その認識もしくは会話がペルソナであるとわしたちはいいません。そうではなく、その特性もしくは変化する情動がペルソナなのです。ヨハネにおいてはロゴスがペルソナではなく、父の認識もしくは計画がそうである、と理解されることを望んでいるように。それ自身が父であり、ちょうど精神もしくは父の善が父自身なのです。

最後に、彼らはヨハネの話を建築家としての人間の例に適用しました。ちょうど建築家のなかには未来の行いのアイデアがあって、それは「形をとった」ペルソナではないのですが、建築家の精神のなかの計画であり、考えなのです。このように創造者である神のなかにはアイデアと計画があったのだ、と彼らはいったのです。それを、神は自ら世界を創造することを通じて、キリストの優れた教えを通じて啓示しようと望んでいるのです。キリストは救済の教えを伝え、神についての証言を明らかにしています。こうした考えもしくはこうした計画は、父自身であったと彼らは述べました。そして、こうした考えについては創世記のなかに記されてある、と。「神は言われた」<sup>(52)</sup>。つまり、宣言した、提示した。ヨハネによる福音書には、こうあります。「万物は言によって成った」<sup>(53)</sup>。つまり、万物はこの建築家の考えを通じて作られた、あるいは事物が成るようにと命じる言葉を通じて。

他方で、ヨハネが「言は肉となって」といったことは、とうとう次のように損なわれてしまいました。そうした計画に従ってキリストは処女から生まれ、福音は人間を招くのではなく、永遠の神が計画となり、こうしたキリストの教えを送り、それを通じて教えの証言を広めた、というようにヨハネは始めた、と。

(次に続く)

注

- (1) 詩編 149-1。
- (2) 詩編 118-17。
- (3) コリント信徒への手紙 1, 1-21。
- (4) ヨハネによる福音書 14-9。
- (5) 出エジプト記 20-2。
- (6) 詩編 110-1, 4。
- (7) ヨハネによる福音書 5-23。
- (8) プラトン『ピレボス』 22c, 『国家』 II, 379c, 380b. 参照。
- (9) 創世記 1-3, 9。
- (10) 創世記 1-1。
- (11) 創世記 1-2。
- (12) 詩編 2-7。
- (13) 詩編 45-12。
- (14) イザヤ書 9-5。



- (15) マタイによる福音書 3-17。
- (16) マタイによる福音書 3-17, マルコによる福音書 1-9 以下, ルカによる福音書 3-21 以下。
- (17) ヨハネによる福音書, 1-3。
- (18) 創世記, 1-2。
- (19) ヨエル書, 3-1。
- (20) ヨハネによる福音書, 14-16, 17。
- (21) ヨハネによる福音書, 10-27。
- (22) 申命記, 6-4。
- (23) 申命記, 4-35。
- (24) 申命記, 32-39。
- (25) イザヤ書, 44-6。
- (26) イザヤ書, 45-5, 7。
- (27) イザヤ書, 45-21, 22。
- (28) コリントの信徒への手紙 1, 8-4。
- (29) エフェソの信徒への手紙, 4-6。
- (30) マタイによる福音書, 3-17。
- (31) ヨハネによる福音書, 1-1。
- (32) コロサイの信徒への手紙, 1-15。
- (33) ヘブライ人への手紙, 1-3。
- (34) コリントの信徒への手紙 1, 3-16。
- (35) マタイによる福音書, 28-19。
- (36) エウセビオス『教会史』, 3-27, 28。
- (37) ヨハネによる福音書, 1-14。
- (38) コロサイの信徒への手紙, 2-9。
- (39) マタイによる福音書, 11-28。
- (40) ヨハネによる福音書, 3-36。
- (41) イザヤ書, 11-10。
- (42) 詩編, 45-12。
- (43) 詩編, 72-5。
- (44) 詩編, 72-15。
- (45) 使徒言行録, 7-59。
- (46) テサロニケの信徒への手紙 1, 3-11。
- (47) テサロニケの信徒への手紙 2, 2-16。
- (48) 創世記, 48-15, 16。
- (49) ヨハネによる福音書, 1-1。
- (50) ヨハネによる福音書, 1-14。
- (51) エウセビオス『教会史』, 7-30。
- (52) 創世記, 1-3。
- (53) ヨハネによる福音書, 1-3。